

【2024 年度浩志会研究会員研究テーマ】

20 年後の未来を切り拓く

2024 年 8 月
研究会員代表幹事
田上 亮輔

1. はじめに

我々が生きる社会は、エネルギー問題、気候変動、ジェンダー平等、少子高齢化、格差の拡大など、引き続き、様々な課題を抱えています。国際社会においても、民主主義や新自由主義が行き詰まりをみせるなど、フランシス・フクヤマの言う「歴史の終わり」は、まだまだ遠いように感じます。また、「VUCA¹」といった言葉が生まれては、すぐに手垢が付いていくように、変化が速い時代であり、旧来型の価値観から脱却する変革が求められている社会ともいえると思います。

こうした状況の中で、2023 年度、我々は、あるべき社会を実現するために、どのように、個人の「公」を育むのか、といった点について議論を重ねました。さらに踏み込んで「社会」や「社会問題」の解像度を上げていきたい、これが、2024 年度のテーマを設定するうえでの、前提となる思いです。

2. 研究テーマ

(1) 問題意識

一般的に「次世代に、より良い社会を引き継ぐ」といった表現はよく耳にします。このように、社会を「引き継ぎ・引き継がれるもの」とする認識は一般的だと思いますが、曖昧模糊としていて捉えがたい、この「社会」を引き継ぐとは、一体、どういうことなのでしょう。

¹ Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字をとった造語で、先行きの予測が難しい状況。

この点、ローマ時代の歴史家プルタルコスは、「舟の破損や老朽化に伴う修理によって、部品が全て入れ替わった舟は、もともとの舟と同じ舟と言えるのか？」と問いかけます。古代ギリシャの時代から繰返し、議論されてきた有名な「テセウスの舟」というパラドックスです。「社会」に引き付けて言えば、構成員である、我々、個人ひとり一人は、産まれ死に、絶えず入れ替わっていますが、こうした中で、「社会」という全体は、どのようにして、同一性や連続性を保っているのでしょうか。このパラドックスに対して、アリストテレスは、(特に) 個々の部品は入れ替わっていても、この舟がどのような形をしているかを決める設計図(形相因)が同じであるため、同一性が維持されると説明します。すなわち、「我々は、代々、引き継がれた、変わらない設計図をもとに、社会を構成している。だから、社会を引き継いでいくことができる」という説明です。こうした説明について、皆さんは、どのように感じますか。何れにしろ、昔から、人は同じようなことに疑問を持ち、議論してきたことを改めて実感します。

先ほど、「変革」という言葉を使いましたが、ジャーナリストである深代惇郎氏が「現代は、お札だけではなく、言葉や情報がインフレだ。『変革の時代』などという言い方で、人に錯覚を与えている」と朝日新聞に書いたのは1975年のことです。今朝の朝刊ではなく、約50年も前の朝刊です。もちろん、インターネットの発達などにより、この50年間で、我々が取り扱う情報量が格段に増加したことは、間違いのない事実だとは思いますが。その一方で、いつの時代も、我々は「(過去に例のない) 特別な時代」に生きていると、思い込む傾向にあることも、また事実のようです。この点、経済地理学者であるベント・フリウビヤは、多くのプロジェクトが予算超過などの失敗に陥る背景の一つとして、プロジェクトの責任者が「自分たちのプロジェクトは唯一無二だから、前例から学ぶことはない」と思い込み、過去の失敗事例から学ばないこと(独自性バイアス)を挙げています²。

その一方で、人間の心理として「正常性バイアス」があることも指摘されています。これは、予期せぬ出来事や変化が起きた場合に、通常の出来事の範疇と、そのインパクトを過小評価する心理のことです。災害時の逃げ遅れの背景には、こうした心理が働いているものと言われます。

² ベント・フリウビヤ/ダン・ガードナー「BIG THINGS どデカイことを成し遂げたヤツらはなにをしたのか？」サンマーク出版、2024年

これらのバイアスは人類の進化の結果であり、身体的に弱い人類が過酷な自然環境の中で、生き抜くために培ってきた機能だとは思いますが、自分たちの直面する変化や課題を、特別なものと思い込んだり、たいしたものではないと過小評価したり、人間の心理は、なかなか複雑です。

VUCAと言われる時代だからこそ、先行きを、しっかりと見据えることは、重要だと思いますが、こうしたバイアスが自分達にあることを自覚したうえで、虚心坦懐に、社会の現状や変化の芽を評価することは、「言うは易し行うは難し」だと思われます。

2024年度は、こうした難しいタスクに、皆で挑戦し、議論することで、理解を深めていきたいと考えています。

(2) 研究テーマの内容

2024年度の研究テーマとして、とてもシンプルな、以下2つの問いを、私から皆さんに投げかけたいと思います。

- ① 20年後、我々は、どのような社会に生き、どのような課題に直面していると予想しますか？
- ② そうした社会課題を回避・解決するために、我々は何に取り組むべきですか？

① 社会課題の予想

20年後、我々はどのような社会に生きているのでしょうか。各フォーラムで、自由に、予想していただければと思いますが、まずは、社会課題やテクノロジーなどについての最新の情報を確認することは重要だと思います。また、これに加え、上述のようなバイアスを排し、日本に止まらず、世界の歴史や先人から学ぶ姿勢も重要です。歴史から学ぶということは、当時と今を比較し、前提となる条件の何が異なり・何が同一かを分析したうえで、教訓を引き出す作業だと考えています。もちろん、分析した結果、重要な前提が異なるために、参考にならないという結論も（往々にして）あり得ますが、そうした結論も財産になるように思います。その場合にも、今よりは社会の輪郭がより、くっきりと見えるようになっているはずです。

さて、20 年後の社会です。例えば、20 年後と言えば、2045 年には、人工知能が人間の知性を上回ると言われています。いわゆる、シンギュラリティーに到達するという予想です。テクノロジーの進歩については、人類がテクノロジーを用いて、ポスト・ヒューマンになるとの壮大な予想や、こうした予想を完全なファンタジーとして否定する言説など、色々な議論を目にします。日本でも、少し前に、「AI に代替される仕事の一覧」などが流行り、よく雑誌に載っていたものと記憶しています。

こうした状況が実現した時、我々の社会は、「多くの人が、AI に仕事を奪われてしまった社会」となるのでしょうか。それとも、「多くの人が、AI を活用して仕事から解放された社会」となるのでしょうか。これは、テクノロジーの問題というよりは、(富の再分配も含めた) 社会システム全体のあり方に左右されるように思います。また、仮に、多くの人が、日々の仕事から、解放された場合、社会はどのように変化するのでしょうか。

人類における有閑階級は、「所有」という概念と同時に誕生したと述べたのは、アメリカの経済学者であるソースティン・ヴェブレンです。ヴェブレンについては、いわゆる、「ヴェブレン効果³」が有名ですが、高度な野蛮文化段階で、有閑階級が担った職業は、共通して、統治、交戦、宗教的職務およびスポーツに分類されると言います⁴。歴史的に、こうした有閑階級が担う職業が尊敬され、(これ以外の) 生活に必須な労働を担う職業とは区別された、という説明は、現代にもつながるものを感じます。ヴェブレンが生きたのは 20 世紀初頭ですので、今後 (既に現代ですら、そうかもしれませんが)、テクノロジーの進歩により、彼が想像できないほどの人が有閑階級となる可能性があります。こうした中で、ヴェブレンが指摘した傾向は、先鋭化していくのでしょうか、それとも、修正されていくのでしょうか。

20 年後の社会を考えると、日本における少子高齢化も大きな課題です。現在においても、官民をあげて、子どもを産み、育てやすい環境整備に向けた取り組みが進められています。こうした取り組みを継続・拡充していくことは、とても重要だと思いますが、生産年齢人口を確保していくためには、移民をどのよ

³ 皆が、競い合って顕示的な消費を行う結果、ある製品の価格が高いほど、それを求める願望が強くなる効果。

⁴ ソースティン・ヴェブレン「有閑階級の理論 増補新訂版」講談社、2015 年

うに受け入れるべきか、という点も、引き続き、論点となります。仮に、移民を多く受け入れた場合、どのように社会に分断を生まず、包摂していくのか。社会における多様性の問題とも言えますが、綺麗ごとだけでは済まない、難しい問題です。こうした問題のヒントは、国民国家の形成の過程にあるかもしれません。

ベネディクト・アンダーソンは、国民国家の形成において、出版資本主義の重要性を説きました。すなわち、宗教的な共同体や王国が衰退する中で、資本主義経済の確立と印刷技術の革新が、国民国家の成立に大きく寄与したと分析します。特に、言語の力に着目し、これまでラテン語で書かれていた聖書が、複数の言語（出版語）で書かれるようになり、この言語がナショナリズムの源泉になったものと説明します⁵。ここでいう「言語」とはコミュニケーションツールと解すべきでしょう。翻って、現代における我々のコミュニケーションツールをみると、リアルタイムの翻訳アプリが開発されるなど、技術革新が目覚ましいですし、メタバースなど、バーチャル空間でのコミュニケーションも拡大しています。その一方で、オンデマンド型の情報共有が主流になる中で、皆が見たいモノだけをみる、情報の「タコツボ化」も指摘されています。

こうした中で、我々は、アリストテレスの言う「社会の設計図」を、どのようなツールで共有し、そのもとで、どのように多様な人々を、社会に包摂していくべきでしょうか。

以上、取りとめもなく、結論のない、問題意識を記述してきましたが、全ての社会課題について触れることは、私の能力の面からも、紙幅の面からも、難しいので、これくらいにしようと思います。もとより、容易には結論の出ない問いです。ぜひ、大胆に、20年後の社会課題について、予想してみてください。

② 私たちの取組み

2つ目の問いは、(①で論じた社会課題が顕在化しないように) 私たちは何に取り組むべきか、というものです。そもそも、私たちの属性は、多層的です。大人であり、日本国民であり、それぞれの組織に属する職業人でもあります。こうした属性の中で、今回は、特に「職業人」として何をすべきか、を中心に議論し

⁵ ベネディクト・アンダーソン「定本 想像の共同体」書籍工房早山、2007 年

てください。各組織を代表して、浩志会に集まった「社会に貢献する責任のある者」としての「責任」について、議論ができればと考えています。

すぐに始められること、中期的に達成すべきこと、色々な対応が議論の俎上に上るのではないかと思います。中には、政治の問題に帰着することもあるかもしれません。そうした時にも、誰かのせいにして諦めるのではなく、自分たちの立場でやるべきことは何か、といった観点からの建設的な議論ができればと考えています。

③ 20 年間の意味

この章を終えるにあたり、「期間」について、少し、補足させてください。今回、①および②を考えていただくにあたり、「20 年間」という期間で区切ることになりました。これは、人生 100 年と言われる時代にあり、働き方・キャリアの多様化が進む中においては、ややナンセンスかもしれませんが、皆さんが「職業人としての責任を持つ期間」として実感が持てるのではないかと、思い、設定した期間です。

もちろん、この 20 年間に生じ得る様々な課題を、上手くやり過ごすための議論を行いたい訳ではありません。20 年後の、さらに、その先も見据え、未来を切り拓いていく観点から、特に、この 20 年間で何をすべきか、皆で議論したく考えています。

3. さいごに

以上が、2024 年度の研究テーマになりますが、(2023 年度の活動を踏まえての自戒の念も込め) フォーラム活動を行うにあたり、大事にしていだきたいポイントについて、3 点、記載します。

一つ目は、常識や定説を疑ってほしいということです。皆さんも、各組織における中間管理職として、日々、多忙な毎日を過ごされているものと思います。私自身、短い期間でアウトプットを出さないといけない仕事も多く、ともすれば、落とし所を見据えた議論のみに終始しがち、と反省しています。また、フォーラム活動においても、プレゼン資料に綺麗に纏めることや、上手にプレゼンすることに意識が行き過ぎると、

どうしても議論が小さくなってしまいうように感じます。これは、大変、もったいないように思います。せっかく、多彩なメンバーが揃っている訳ですから、特に意識して、自由に、大胆に、常識にとらわれない議論を行って頂ければと思います

もちろん、重要なのは、常識にとらわれない「姿勢」です。常識を否定すること自体に、意味がある訳ではありませんので、検討の結果、常識が正しかったという結論も歓迎されます。

二つ目は、浩志会のフォーラム活動を、是非、「学びの場」にして、いただければと思います。答えのない問いに対して、喧々諤々と議論をすれば、自分の思考の型や弱さに気づかされることがあると思いますが、こうした自覚は、とても貴重です。こうした気づきを得るためには、議論に主体的に参加する積極性と、相手に敬意を払い、その意見に真摯に耳を傾ける謙虚な姿勢が重要だと思います（相手に敬意を払いながら、白熱した議論ができるのは、浩志会のよい伝統だと思います）。また、ぜひ、座学にとどまらず、積極的に、現場に出向き、社会課題に向き合っている方や歴史に詳しい方に出会い、話を聞いてみてください。新しい気づきが、必ずあるはずです。

そして、最後に、最も重要な点は、フォーラム活動を、ぜひ、楽しんでください。仕事にプライベートに、皆さん、忙しいと思いますが、浩志会の研究会員として、自由に議論・研究できる期間は、たった2年間だけです。どうせやるなら、楽しんだもの勝ちです。

それでは、この1年間、大いに議論し、大いに親交を深め、大いに楽しみましょう。

（そして、20年後。また皆で集まって、答え合わせをしましょう！）

以 上

※ 本稿における意見・考え方は、筆者の個人的な見解であり、浩志会および筆者の所属組織とは無関係であることをお断りします。